

熊本日日新聞

(夕刊) 平成7年(1995年)11月10日 金曜日

WIDE FRIDAY

障害者作業所 宮本 誠一さん (33)
「夢屋」代表学校教育に限界感じ
障害者と第二の人生

新天地

宮本さんは菊池、阿蘇地区の小学校で五年間教職を務め、今年春に退職。阿蘇郡一の宮町に四月、障害者の作業所を、自閉症の下原猛さん(30)と開いた。「向いていると思った」教師生活では、つねに疑問を抱えていた。「学校教育で特に大切なことは、仲間づくりなど集団を通しての活動だと思います。しかし、学校は学力向上ばかり求める。それが子どもたちに競争意識を生み、仲間づくりを妨げる…」退職のふんぎりがついたきっかけは個人学習診断テスト。「今以上に勉強したい子もいれば、したくない子もいる。なのに一律のものをおしつける学校教育に限界を感じました」

第二の人生に、二年前から付き合いがある猛さんと阿蘇地区で初めての作業所運営を決めた。

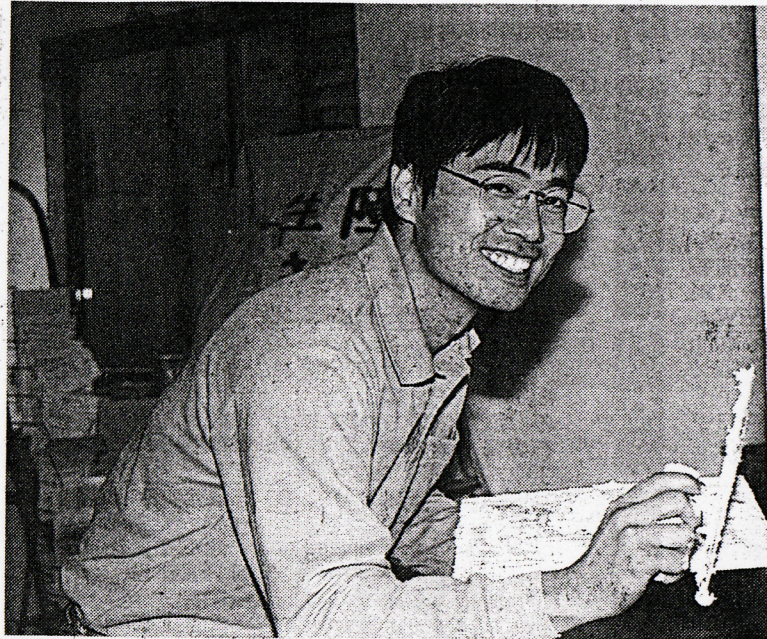
「障害者と二十四時間つきあう家族の負担は大きく、障害者も迷惑をかけないよう家の中でひっそりと生きている。障害者が生き生きと過ごす場所が家の外に必要なんです」

作業所は猛さんの家の一階約百平方メートル。二人でくぎを抜き、壁を塗り替える作業を根気よく続けている。完成後は、手作りパンの宅配もできるコーヒーストックを開く予定。毎日、同町周辺を車で回り、PRしている。

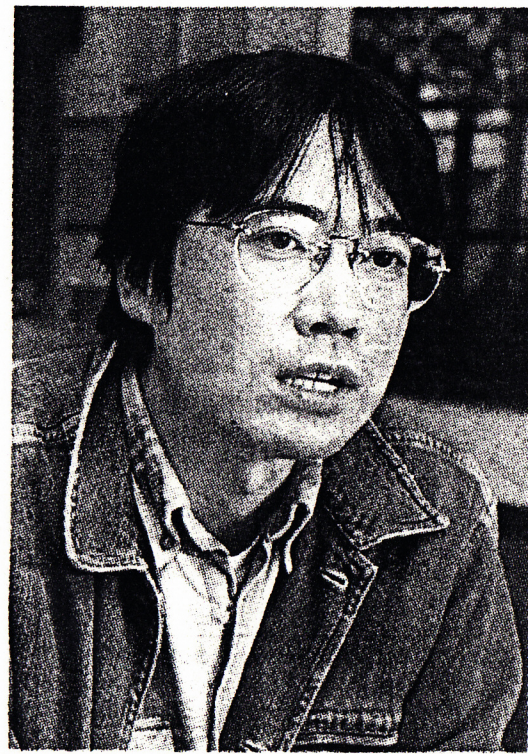
「最近、猛君は大事な話の時など静かにできるようになったね、と言われます。知的障害者も社会に出ることできるんことを学んでいくんですよ」

給料は、作業所設立に賛同した人たちがつくった基金から支払われるが、教師時代の五分の一。「妻の給料と合わせて何とかやっています。仕事が軌道に乗ればもう少し増えるでしょうが、作業所には行政の支援が不可欠です」

今では猛さんのほかに障害者四人が作業所に顔を出している。「健全者の人にもぜひ立ち寄ってほしい。彼らから学ぶことは大きいですよ」



「夢屋」の壁塗りをする宮本さん



「宮本らしくない作品とも(知人に)言われたんですが、じわっと味が出るというか、結構気に入ってるんですよ」

控えめに喜びを語る。

受賞作の「ウォール(＝壁)」「(五十枚)」は、壁に漆喰(しっくい)を塗るアルバイトを、友達と五人で引き受けた高校生が主人公。

一人やめ、二人やめするなかで、最後までやり抜く意味、壁は壊れることを前提に作られると知った時の驚き、円形の壁が完成するにつれ、仕事の最初と最後が分からなくなるという発見。壁を塗る単調な作業に、「生きる」とは「という問いを重ねた。」

北九州大文学部在学中に、大岡昇平や武田泰淳ら戦後文学に傾倒した。自ら書き始めたのは

●——生きる本質見つめたい

二十代半ばから。中央の文芸誌などに応募し、六年前からは「詩と真実」にも参加している。

「現実にとだわり、人と人の関係を描くことで、生きる本質を見つめたい」という作品は、不安、苦悩、あるいは差別と、真正面から向き合う。

近作「真夜中の列車」では、障害者と健常者が共生するなかで浮上する差別、性、暴力などの問題を丹念に描いた。問題を乗り越える新たな「関係」の可能性を探り、今年の「部落解放文学賞」に選ばれた。

五年間、小学校で教壇に立ったが、県教委の個人学習診断テストに反対して退職。三年前、阿蘇郡一の宮町で、自閉症の青年や地域の障害者と、パンを焼き販売する喫茶店形式の障害者作業所、「夢屋」をオープンさせた。その時の大工作业が、受賞作のヒントになったという。

「これまでの現実につきすぎた作品から、はつきり飛翔(ひょうしょう)した」という選者評に、「今回は僕の意図を隠して、比喩的に仕上げた。こういう手法も、現代をかすめる方法じゃないかと」。さらりという言葉に、自信ものぞかせる。荒尾市出身。大津町大津。